

明治三十五年

(二月)

一月一日 甲申 水曜 晴。

朝六時起。一同正服。八時食堂ニ集る。廿五人也。椒酒、雑煮を祝ふ、例の如し。家内一同壮健ニて、余を始め一同第六教室ニ集り、天皇后兩陛下ノ万歳を唱え、校長万歳、学  
校万歳、生徒一同万歳を唱え、君か代を三唱す。畢而一同氷川神社ニ詣て、神酒をいた  
き、散歩して帰。隣家小学校え寄、式等を観る。十二時也。賀客、石山基頭、朝より終日、  
夜ニ入て帰。

一月二日 乙酉 木曜 晴。

朝、昨日の如し。食堂ニ集り雑煮を祝ふ。午下早々、余、年始廻りする。先、閑院宮、三  
条家、江副氏、小松宮、岩倉、戸田氏、田村氏え行て帰。賀客続々来。

閑院宮殿下より御召一反、緞子羽織裏。

受方摘要 三条家、五円。

弘方摘要 車夫祝義、二円。

\*祝義(祝儀)

一月三日 丙戌 金曜 晴。

歌かるた遊ひにて、朝より夜に十一時頃迄遊ふ。

\*歌かるた(歌カルタ)

一月四日 丁亥 土曜 晴。

来客、石山すま子、大炊家政、近藤八重子、貴子。

一月五日 戊辰 日曜 晴。

余、観世会ニ行、終日能見物す。弘、石山家え帰る。来客、田島春子。愛治郎、横浜ニ行。  
去ル二日原鉄五郎死去ニ付、原氏え悔ニ行。

原氏より繻珍帯。

弘方摘要 観世場代二間ニテ、廿円四十銭。

一月六日 己丑 月曜 入寒。晴。

来客、重威、観世清廉、久米民之輔、小供三人、松前藤子。

受方摘要 松前藤子、五円。

\*小供（子供）

一月七日 庚寅 火曜 晴。

人日のお粥もめて度祝ふ。来客、島田信子、岡崎忠子、佐藤尚子、大炊晨子、奥村五百子、桐島光子。塾生追々帰塾する。訃音、備後橋本吉兵衛父静娛義去ル二日死去。米倉千賀子、一月一日女子**妍婉**す。

受方摘要 小松宮、五円。田中静、三元。田中光、三元。小泉竹、三元。  
弘方摘要 姉良様次え五円。

\*めて度（目出度） \*義（儀） \*妍婉（分婉）

一月八日 辛卯 水曜 晴朗。

昨夜、雪も少々、雨あられの音にて寐も就ぬに、朝戸明て見れば、**豈** **料**、天地一変して庭の景色はさなから金剛水晶**玻瓈玲朗**として、極楽浄土を現出す。日出にしたかひて、樹木に**英**して紫金色となる。実に筆にも**言**はにも**ものへかたし**。有かたしとも忝なしとも奇々妙々不可思議也。余は今年六十三歳になれとも、かゝる景色は始めて也。天を拝し地を拝して、有かたしとさけふ。例年の如く始業式執行す。午下一時ニは生徒皆集、一時半より第六教場に参列す。初、君か代、次、校歌、校長年の始の辞を朗読す。又唱歌遊技一、二、三、四年の四廻を畢而、余興福引、四時全畢。会する者百八十人余也。入塾、田中秀子。是より此八日を金剛日として、当校始業式の大吉瑞とする。

天津神のしわざなるらむ**地**も木もみな金剛の世とはなりにき

受方摘要 三条治子、一円五十銭。上杉琉、一円。吉田二人、二円。田中光、作、三元。田中静、三元。斎藤梅、五円。

\*明て（開けて） \*豈 料（あにはからんや） \*玻瓈玲朗（玻瓈玲瓏） \*英して（映して） \*言は（言葉） \*のへかたし（述べかたし） \*地（つち）

一月九日 壬辰 木曜 晴。

今日より授業始をなす。入塾、小田切伴子。

鈴木泰子、更紗一反。斎藤常子、袖更紗一反。来栖貞子より、**白ふらむねる**一反。

受方摘要 斎藤常、二円五十銭。

\*白ふらむねる（白フランネル）

一月十日 癸巳 金曜 晴、風。

授業する。書をよす、鈴木泰子、戸田米子。

一月十一日 甲午 土曜 晴。

授業畢る。京都、大坂、美濃え小包郵便出す。若松典侍、糸桜内侍、大聖寺、水菓師寺、木田氏、遠藤氏、青木氏、唯専寺、願泉寺、美尾の氏、寺田氏、田中三五郎、辻八千、多豊尾。

\*美尾の氏(美尾野氏)

一月十二日 乙未 日曜 晴。

来客、門野玉、子供。余、午下年賀廻りする。始め佐野隠居え、近藤廉平、裏松、米倉え行、久々にて一平氏ニ逢ふ。大イニ悦むて、虎の軸物数福を觀る。千賀子出産の嬢米子も大く、壯健らしく、よき子也。松魚二円、緋友仙産衣を祝ふ。紅梅典侍悔二行、金千足御備物する。公爵島津家を問ふ。田鶴子様ニ御目ニ懸り、御酒肴夕餐を戴く。久々にて古しへの御物語りなどして、夜ニ入て帰る。

\*数福(数幅) \*緋友仙(緋友禪) \*御備物(御供物)

一月十三日 丙申 月曜 晴。

課業例の如し。橋岡氏来る。

受方摘要 渡辺やす、五円。

一月十四日 丁酉 火曜 晴。

来客、関野ちか子。英国教育家なるミスヒユス及安井てつ女、学校參觀ニ来る。当校教育二付、無洩尋問せられ、大イニ悦んで、二時より四時迄すへてを見て帰る。大和田氏来る。

一月十五日 戊戌 水曜 晴。おしなへて朝三十度前後也。

午下、墓参して五軒町年賀二行。愛国婦人会、階行社にて議事アリ。四時畢而帰。来客、別府静子。

受方摘要 別府静子、七円。

\*階行社(偕行社)

一月十六日 己亥 木曜 晴。

(コノ日、記事ナシ)

一月十七日 庚子 金曜 晴。

来客、酒井夏子、松平輛子。書をよす、大聖寺、呉、久松操治、鈴木角衛。受方摘要 酒井氏、二円五十銭。

一月十八日 辛丑 土曜 晴。

千久子五年祭志として、原富太郎、田村利七、姉小路良子殿、そば饅頭腰高廿入一箱つゝを贈る。

受方摘要 白石千蔵画料、三円。

一月十九日 壬寅 日曜 晴。四時頃より風甚し。

午下早々北白川宮様御年賀に参る。

受方摘要 北白川宮、三円。

弘方摘要 車夫祝義、一円。

\*祝義(祝儀)

一月二十日 癸卯 月曜 晴。

書至る、吉田滝子、錦織隆子、山口徳太郎。姉小路公義殿、**ふらねる**一反、千久子五年祭志贈る。御寺御所、同一反を贈る。

\*ふらねる(フラネル)

一月二十一日 甲辰 火曜 晴。

課業畢る。来客、大和田氏。夜、斎藤仁子きたる。十時過帰る。

一月二十二日 乙巳 水曜 雪。

昨夜より雨降出し、今朝にかけて細雪ふりつゝ。また世は白妙の清きけしきとなり、

**これそ**このけふの手向と成りにけり木ことにかゝる雪のしら木綿

千久子五周年祭に付、客を招く。午下二時よりの案内、家内一同墓参する。重威夫婦、石山すま子、万里小路伯、玉枝、石山基遂、山形きく。四時頃より御膳を出す。御焼物に白**ふらねる**一反つゝ。皆々帰宅の頃は雪もやみ、月出てさやかに。七時畢。

\*これそ(これぞ) \*ふらねる(フラネル)

一月二十三日 丙午 木曜 晴。

来客、井上市兵衛、大坂村上幸助、岡崎忠子、広子。

受方摘要 吉田、錦織、二円五十銭。

一月二十四日 丁未 金曜 晴。

課業畢る。午下、御所姉小路さまの局ニ参る。良子さま被任権典侍、恐悦申上る。御間のものなといたゞき、ゆる／＼と御咄しいたし、四時過帰る。松魚大箱、すもし御祝ニ上る。

北白川様より稲子来られ、八時過帰殿す。

姉小路良子さまより白羽二重一反。

受方摘要 姉良さま、二円五十銭。

一月二十五日 戊申 土曜 晴。

来客、斎藤仁子、山本久子。素謡発会す。岡崎忠子、石山すま子、小沢氏、橋岡。

羽衣 忠子 雲林院 桃子

敦盛 すま子 巻絹花

角田川 小沢氏

独吟、仕舞もありて、興弥深し。六時畢。

一月二十六日 己酉 日曜 晴。日中も四十度、寒甚し。

終日揮毫する。

一月二十七日 庚戌 月曜 晴。

書至、斎藤仁子、今日帰国する。書を寄す、三条かつ子え。来客、菅子、岡沢山子、片岡君子、山県孝子。夜、橋岡、青山氏来。片岡氏より毛織もの一反。

一月二十八日 辛亥 火曜 晴。

来客、大和田氏。

一月二十九日 壬子 水曜 晴。

午下三時より正子を残して一同五軒町二行、約の如し。寿もしにて新年会。夜八時過て一同帰。

一月三十日 癸丑 木曜 陰。

孝明天皇祭。午下早々中村元嘉氏え山根氏の火災見舞二行。山根氏を敬子の婿も皆居られて、暫時閑話して帰。

第五聯隊第二大隊将士二百余名、雪中凍死の詳報。青森を距而六里なる八甲田山下田代村に向ヶ出発せしか、途中大風雪に行悩み、進退谷りて遂に四散したるに、二百十一名が凍死せるを、追々死体発見せる惨状アリ。

\*山根氏（を（ママ））

一月三十一日 甲寅 金曜 雨。

宇都宮多歌子、明日より一ヶ月間療養之為旅行、休暇願出る。

受方摘要 会計より九、十、十一、十二、廿円請取。

払方摘要 昨三十四年九、十、十一、十二雜費、七十円ヲ仕払す。

\*仕払す（支払す）

(二月会計、記載ナシ)

(二月)

二月一日 乙卯 土曜 雨、細雨終日。  
終日揮毫す。

二月二日 丙辰 日曜 朝より終日雪と雨と降つゝく。  
朝十時より観世会二行、観能。終日の楽しみ也。

二月三日 丁巳 月曜 晴。  
(コノ日、記事ナシ)

二月四日 戊午 火曜 晴。  
午下、永田町に行、帰途五軒町に屏風を見て帰。

二月五日 己未 水曜 晴。  
来客、千家信子。夜、斎藤仁子来る。愈妹清子と吉田くら蔵氏の結納取替し済。絹地総金箔押したる屏風一双買得す。外に無地金箔の屏風一双と也。

二月六日 庚申 木曜 晴。  
来客、鳥尾千世子。

二月七日 辛酉 金曜 晴。  
午下散歩して、五軒町に往て帰。  
受方摘要 三条家より、一円五十銭。

二月八日 壬戌 土曜 晴。  
終日揮毫ものす。

二月九日 癸亥 日曜 晴。  
朝九時より桃子同道にて観世会。大江氏、礎開きあり。終日観能して帰。  
払方摘要 大江氏え一円。観世場代、二円五十銭。  
\*礎(きぬた)

二月十日 甲子 月曜 晴。  
来客、橋岡氏。

二月十一日 乙丑 火曜 晴。  
来客、松平久良子、久々にて訪問しられる。旧を話して帰。

二月十二日 丙寅 水曜 晴。  
来客、京都淑女学校校長田島教恵氏。青森第五聯隊凍死者え義捐金廿五円、塾生より。

二月十三日 丁卯 木曜 雪。朝より雪ふり出て、始て庭の面けしきつきたり。  
書を寄す、三条篤子、俵松子、岩倉八千子、左右田静子。

常ならハ花とたゝへて見るへきをことしハ雪にうたへさりけり  
青森の五聯隊の凍死者を思ひやりて。

二月十四日 戊辰 金曜 晴。  
(コノ日、記事ナシ)

二月十五日 己巳 土曜 晴。  
朝墓参して帰。午下、永田町に行て帰。

二月十六日 庚午 日曜 晴。  
午下より觀世の乱能を見る。稻荷祭りの奉納、おもしろき事也。来客、志賀鉄千代、丹羽花子、五島善子。

弘方摘要 觀世え千足。

二月十七日 辛未 月曜 晴。  
(コノ日、記事ナシ)

二月十八日 壬申 火曜 晴、風甚し。  
来客、午下福田芳子。謡数番をうたひて、夜八時頃帰られる。

二月十九日 癸酉 水曜 陰。寒氣いみしうて空も雪け催したり。  
地震。

二月二十日 甲戌 木曜 晴。

受方摘要 会計より一月分、五円。

払方摘要 一月分雑費、十三円四十九(錢)。ちふ一反、白ちふ一反、六円九十錢。  
\*ちふ(秩父) \*白ちふ(白秩父)

二月二十一日 乙亥 金曜 晴。

午下、田中健三郎氏を訪問す。国子生産の悦にとて、産衣、鶏卵を贈る。出生の男子壮健にて、**姈**したる時に体量尠貫六十目と云ふ。命名、不二雄といふ。北白川宮様を伺ひ、又閑院宮様を伺ひ、新宿石山家を訪問して帰る。

受方摘要 九条家より二円。

\***姈**(分婉)

二月二十二日 丙子 土曜 晴。 五十度。

朝、墓参して帰。はしめて春らしく暖気なり。

二月二十三日 丁丑 日曜 晴。

朝七時出門、余、桃子と同道にて本所八時之汽車に乗して、津田沼**九々田閑院宮邸**ニ詣す。始めて参りたる事なれハ、皆々大／＼ひつくりにて、暫時にして御息所に拝謁申上。大／＼御満足さまにて、此御住居も田舎には稀なる建築にて、御せまきにハ候へとも御勝手よろしく、気候も暖気にて先六十度、五度位よほと暖也。御昼御洋食御相伴いたして、御散歩の御供いたし、鷺沼といふ海岸に出て、貝などひろふ海辺の遊びもまた面白く、其うち**さし汐**にて御帰殿ニ相成。御八ツも戴候て、御暇申上て、四時四十五分の汽車にて帰。今日の天氣に風もなく長閑に日本晴也。

払方摘要 汽車往還、一円四十錢。車代、三十錢。車夫へ三十錢。御土産御家来へ二円

\***九々田閑院宮**(**久々田閑院宮**) \***さし汐**(**差し汐**)

二月二十四日 戊寅 月曜 晴。

払方摘要 橋岡氏え三円。

二月二十五日 己卯 火曜 晴。

来客、今津久子。

二月二十六日 庚辰 水曜 風甚、空陰晴。

午下、香川氏え行、不逢て帰。



二月二十七日 辛巳 木曜 晴。  
香川氏より使来。来客、波多野伝三郎細君はま子。

二月二十八日 壬午 金曜 晴。五十八度。  
来客、五島盛光。

(二月会計、記載ナシ)

(三月)

三月一日 癸未 土曜 雨。

朝、墓参して帰。珍らしき雨にて、午下雷鳴すさましく、四時頃全晴。三ツばん火あり。  
\*三ツばん (三ツ半)

三月二日 甲申 日曜 晴。また冴帰り、寒さつよく。

朝九時より観世会二行。西王母、朝長、桜川、蘆刈、鞍馬天狗。くら間を残して帰。所々の梅花、二、三日前の暖気に満開す。靖子田舎より帰来、雛祭りする。

\*くら間 (鞍馬)

三月三日 乙酉 月曜 晴。

朝霜柱たつ。寒気つよし。橋岡氏来る。習字試験二かゝる。

三月四日 丙戌 火曜 朝雨雲あしく、昼前より空晴わたる。

習字試験。来客、松井金子母と同道にて御礼ニ来る、広田武子、立石八重子、仁科駒。

受方摘要 渡辺澄、二円。

払方摘要 大和田氏、二円五十銭。

三月五日 丁亥 水曜 晴。四十度、寒し。

習字試験する。来客、山内節子母と同道にて来る。愈山内氏と結婚の式を挙るよしにて御礼申出る、横浜原安子。

三月六日 戊子 木曜 晴。

午下、蒲生先生八日一周忌ニ付、備もの持参して後室に逢て帰。五軒町を訪問して帰。

\*備もの (供もの)

三月七日 己丑 金曜 晴。  
来客、佐藤静子、謡数番をうたふて、夜九時帰られる。

三月八日 庚寅 土曜 陰。  
午下、上野、玉章還暦画展覧会に行、一々縦覧す。可見ものあり。実に達者なるものなり。それより浅草婦人会二行。法話済て、惣会の相談にて、夜二入て帰る。

三月九日 辛卯 日曜 晴、午下三時頃より雨。  
余、正子と同じく小池清女を連れて、朝十時十分の汽車にて横浜三ノ谷原氏二行。横浜着、二頭馬車迎來りて、三人同車にて行。原氏にては待設けられ、庭の支那館にて休憩、模様変りたるを散歩して、種十株の梅花満開、奇香鼻をつく。午餐会席済て、下なる新築に行。この家屋広大、子供教育の先学文所也。其内雨になりて、一宿のつもりに成て、宅え電話にて泊りの事申遣す。夜までこゝに居て、本宅に帰る。晚餐会席、皆珍物珍味也。十一時就眠。  
弘方摘要 汽車三人分、一円廿銭。

三月十日 壬辰 月曜 晴。六十度余の暖気なり。  
朝とく起て、先、日の出を拝む。一天紅の如し。西には雪の不二の峰、画にも及はぬ風色也。庭の小松原写生して、内の人々起來りぬ。朝けもたうへて、十時頃あるし夫婦と四人、同馬車にて山に帰りぬ。昼餐洋食を饗せられぬ。種々名軸を見る。又庭を逍遙して、三時十分の汽車にて帰る。橋岡来る。

\*朝け(朝餉) \*たうへて(食べて) \*あるし(主) \*逍遙(逍遙)

三月十一日 癸巳 火曜 晴、寒し。  
課業例の如し。

三月十二日 甲午 水曜 晴。  
田中氏を訪ふて帰。

三月十三日 乙未 木曜 朝晴朗、午下雨。  
来客、京都大聖寺内祖疏、久々にて面会いたし。旧を語りて互に大く悦たり。同、藤崎、女中芳を目見に連來る。

三月十四日 丙申 金曜 朝極々晴朗、午下雨。  
書至、昨十三日午前九時三十分、大村梅子女子分娩のよし、報來。

三月十五日 丁酉 土曜 晴。

朝、墓参して帰。京師水薬師より、そら豆着。書をよす、水薬師鏡台院、大村徳敏氏え。

三月十六日 戊戌 日曜 晴。

朝九時より宝生金五郎父子の催能を觀世に見る。四時半畢而帰る。

弘方摘要 能場代、三円。

三月十七日 己亥 月曜 晴。

(コノ日、記事ナシ)

三月十八日 庚子 火曜 晴。六十度。

彼岸の入り。午下早々声聞二行。北白川宮様え参而、已而帰。来客、石山すま子、一宿。

三月十九日 辛丑 水曜 晴。六十五度。

あまり長閑さに、余、桃子と同道にて、散歩しつゝ五軒町を問て帰る。午下二時頃、すま子帰らる。岡崎忠子来られる。

三月二十日 壬寅 木曜 陰。

来客、大橋幸子。

三月二十一日 癸卯 金曜 雨。

青木幾恵、田中静子、卒業製作画落成す。来客、岡崎忠子。石山基慶、安倍娘と見合する、五軒町姉邸にて。

三月二十二日 甲辰 土曜 雨。

午下、北白川宮様ニ詣して、日暮去る。来客、石坂松野、石山基慶。弘帰宿す。  
弘方摘要 本代、二円四(十)五(錢)。

三月二十三日 乙巳 日曜 雪。四十度。

朝起。庭白妙に雪ふりて珍しとも珍らし。弘帰る、新宿え。桃子、大村家え出産の御祝ニ出る。緋の板しめ産衣、鶏卵を祝ふ。弘、新宿ニ帰る。

\*板しめ(板締め)

三月二十四日 丙午 月曜 雪。四十度、二日間の雪にて寒さも強し、可驚。

試験全畢。

三月二十五日 丁未 火曜 陰。  
塾生、早朝より続々帰省す。来客、岩浪稲子。

三月二十六日 戊申 水曜 晴、久しふりにて晴天、快し。  
来客、吉村滋子、堀田家使藤女。園中花始てひらく。  
吉村しげ子、反物一反。

三月二十七日 己酉 木曜 雨、風なし。又雨にて終日うつ／＼し。  
残りの塾生一同、隣の小学校卒業式に臨む。厚徳会より同小学校へ金十円寄附す。泰、一番汽船にて渡房する。

受方摘要 桃子より五円。

払方摘要 宇都宮氏、五円。

三月二十八日 庚戌 金曜 晴、午下二時頃雨、又止、夜雨。  
余、桃子、昼前より深川堀田家へ行、一宿す。

この朝明かたに、夢中、余が善光寺の坂を登り行に、大きな松の木に美しく咲き花の咲きたる木あるき行を見て、珍らしとて写生いたさんと思ふ折しも、沢蔵稲荷の上より南一面光明の世界となりて、是が其実の極楽世界也とて歓喜に堪たり。実に靈夢の有かたさ、手の舞、足の踏み所をしらす。

払方摘要 堀田家来え弍円五十銭。

三月二十九日 辛亥 土曜 晴、天晴朗。  
種々珍ら敷御咄し有、一宿。

三月三十日 壬子 日曜 晴、晴陰定まらず。

昼餐後、誥別して帰。

受方摘要 堀田氏より五円。

三月三十一日 癸丑 月曜 晴。園中桜花満開。

明日準備二忙し。来客、片岡氏母、橋岡氏。

払方摘要 橋岡氏、三円。

(三月会計、記載ナシ)

(四月)

四月一日 甲寅 火曜 先々晴、折々くもり、風なくして極々静かなる好天なり。卒業証書授与式執行。午下一時、生徒一同出席。退校、堀内誠子。愛治郎足部いたみ甚し、この夜より始まる。堀内より白紬一反。

四月二日 乙卯 水曜 朝より雨いと如し。ふるかふらぬか分らぬながら、四時頃また降出しぬ。

午下一時、校友会特別会員相談会相開。出席者三十五人也。すへての相談相齊ひぬ。華族会館にてのつもり也。丹羽氏より白紬一反。

四月三日 丙辰 木曜 晴、晴朗、風強し。

朝起て江戸川の花を見る。観世楼上の花もよし。しはらくして帰る。珍らしき天気にて、中の橋の人雑沓す。午下、小松宮様二伺候す。兩殿下二御拝謁申上、音楽二番伺ひて去る。閑院宮様え伺候する。殿下二拝謁して、御苑中又遠望の風色を賞して帰る。横浜醍醐あか入塾。井上市兵衛来る。

四月四日 丁巳 金曜 晴。

予て約の如く、午下一時より原宿松前子園遊会二行。空も殊の外晴わたりて、花はいつれも真盛りにて、来会者も多く、御茶屋、御でんや、煮こみや、御すもしや、御団子やなどにて、余興、楽隊、講談、畜音器もあり、立食饗応にて、五時頃帰る。帰途、江戸川の桜花二人の雑沓、川舟の賑はしさ、人気のたちたる事、実に可驚也。

醍醐より繻珍帯一筋。

受方摘要 田中静子より十円。

\*畜音器(蓄音機)

四月五日 戊午 土曜 雨。

授業始をなす。新入生も多く、塾生はとても新入六ツケ敷、只々断るのみ也。

受方摘要 宮崎貞、一円。吉沢徳、一円。

四月六日 己未 日曜 晴。

朝より観世会二行、五時帰。

四月七日 庚申 月曜 雨、終日雨。

愛治郎、足部の畳づれ一層ひとく相成、井深氏もとてもわか手にては及はぬよし申出し、

佐藤病院え入院然るへしとて、急佐藤病院え電話にて依頼いたし、すぐ入院の準備して、午下車に漸の事にて乗て、正子附添入院する。家内大く困雑。

\* 暈づれ (暈擦) \* わか (我が) \* 困雑 (混雑)

四月八日 辛酉 火曜 晴。

余、午下弘を連て病院二行。此日、手術を行ひ、マヤク懸てのよし也。格別の障りもなくて安心す。石山すま子も来られる。暫時にして帰る。

\* マヤク (麻薬)

四月九日 壬戌 水曜 晴。

来客、山根文子。横浜より原氏の使にて井上氏見舞二来る。已而又病院え行れる。余の誕生日二付、酒肴料次え出す。

弘方摘要 三浦、佐伯、一円、外次一同え廿銭ツゝ。表取替。

四月十日 癸亥 木曜 雨、雪ちらつく、珍らし。四十度。

来客、入塾生の親等二面会す。

受方摘要 吉沢氏、一円。

四月十一日 甲子 金曜 晴。朝霜ばしら立、氷を結ふ。午下雪ちらつく。不順無究。

四十度。

朝より午下二時迄授業。畢而四時より駒込佐藤氏え行。御夫婦にて大くもてはやされ、謡すゝめられたれと、眼鏡わすれたりとて断て、点灯頃帰る。書を寄す、千葉堀田氏え。

\* 無究 (無極)

四月十二日 乙丑 土曜 明。

入塾生の親等に続々面会す。

受方摘要 高瀬よし、五円。

\* 明 (晴)

四月十三日 丙寅 日曜 晴。

来客、女子美術学校横井玉子。午下、余、栄子と病院を訪ふ。追々熱はとれ、食事も粥三碗すゝむ。暫時咄して帰。

\* とれ (取れ)

四月十四日 丁卯 月曜 晴。

来客、宇都木茂子久々にて面談す、橋岡氏、横川逸子父。校友会、愈大学より許可も有て招

待状出す。現塾、通生徒をのぞひて、二百五十枚出す。

受方摘要 宇都宮紹介飯田潤筆、五円。

\*のぞひて(除ひて)

四月十五日 戊辰 火曜 陰。

朝墓参して帰。

(四月十六日、十八日、記載ナシ)

四月十九日 壬申 土曜 雨。

(コノ日、記事ナシ)

四月二十日 癸酉 日曜 晴。

明日の準備にいそかし。

受方摘要 酒井夏子、五円。

四月二十一日 甲戌 月曜 晴。

春季校友会、大学植物園二開く。朝少々曇りたり。暫時にして晴。余、十時より園二行て準備する。江副氏より寄附なる門の国旗、大々的見事なる集会所、正会なる庭に装飾、各国の旗、水に英してさんらんたり。楽隊も来り、如約一時皆集り会す。凡三百人余也。余興には園遊はなし、日本西洋手品、畜音器、真子や、朝より終日真子細工する。茶亭買請、みかん、団子、柏餅にて特別員接待する。庭の入口には特別員会費徽章取替にて、雑沓限りなし。立食ハ富士見軒来りて装飾、一時に二百人のつもり、別間にも洋食欲せぬを弁当を出す。畢而第二立食す。遊伎も有て、四時より帰路の閉会を告る。皆々悦を尽して帰るぬ。

受方摘要 松前藤子、五円。

\*英して(映して) \*さんらん(燦爛) \*園遊(円遊) \*畜音器(蓄音器) \*真子(糝粉) \*真子細工(糝粉細工) \*遊伎(遊技)

四月二十二日 乙亥 火曜 晴。

臨時休業。来客、大坂より岡末訪はれ、久々にて旧を話し、朝より夕方迄。

四月二十三日 丙子 水曜 晴。

業畢る。来客、斎藤常子退校御礼ニとて、佐野隠居、母宮子来られる。五時過て、余、田村氏を問ふ。夜ニ入て又病院を問て帰。

受方摘要 斎藤常子、三十円。

四月二十四日 丁丑 木曜 雨。  
(コノ日、記事ナシ)

四月二十五日 戊寅 金曜 晴。寒し。

来客、長谷川一彦氏、幸子卒業の御礼ニ来る。堀田伯え偵信死去ニ付、玉串料千疋を備えル。三浦氏使者す。桃子、河辺男え男子出産の悦ニ行。八丈島産衣、松魚を祝ふ。丹羽氏えも喪中見舞ニ行、又加茂氏え女子出産の悦ニ行。

受方摘要 長谷川一彦、十円。

\*備えル(供えル) \*八丈島(八丈縞)

四月二十六日 己卯 土曜 雨、終日降つゝく。

午下二時より、余、桃子と婦人教育会総会、鍋島邸ニ開かる。雨中ニ付洋館にて余興、暫時にして帰る。則駒込佐藤氏の園遊会ニ行。余興、講釈、落語、音楽、畢而立食、入夜而帰。

受方摘要 吉田治、同松、八十島増、十五円。

払方摘要 教育会当日会費、六十銭。

\*講釈(講釈)

四月二十七日 庚辰 日曜 雨。

観世清廉催能、余、桃子と終日見物して帰。病院より明日退院のよし申来る。

払方摘要 観世場代、二円。

四月二十八日 辛巳 月曜 晴。

午下二時、愛治郎退院する。一同の悦甚し。然し足は立ゝず、是より四日目位に通ひて治療を請るよし也。

四月二十九日 壬午 火曜 雨。

朝より雨にて、夜半の豪雨おそろしく。

四月三十日 癸未 水曜 晴。

来客、万里小路通房伯。増本氏裁縫教員、急に日向帯え帰国す。

払方摘要 宇都宮氏、五円。

\*日向帯(飢肥)

(四月会計、記載ナシ)



(五月)

五月一日 甲申 木曜 晴。  
朝、墓参して帰。はしめて裕を着す。

五月二日 乙酉 金曜 晴。夜来豪雨、おそろし。  
(コノ日、記事ナシ)

五月三日 丙戌 土曜 晴。七十五度、始而あつし。  
来客、武村女史、画を依頼す。  
受方摘要 伊達氏、一円。

五月四日 丁亥 日曜 晴。七十三度。  
朝より観世会二行、正午帰宅す。余、桃子と同道にて高輪毛利邸園遊会ニ会す。大村子、静子様御生産の披露会也。庭中擲擲、牡丹、藤花真盛り、其余ハ新緑したゝる如し。庭中に御茶屋も有、余興狂言三番後、立会、五時退る。来客、横浜小野妻。雄児帰来す。はひもし立もし、こゑふとりて骨格もたくまし。一宿す。  
小野氏、反物。

\*擲擲(躑躅) \*はひ(這ひ) \*こゑふとりて(肥太りて)

五月五日 戊子 月曜 雨。夜に入て大雨盆をくつかへす。  
来客、横浜原氏使井上来的。雄児の初節句の祝ひとして御召縮緬一反、松魚三円。入塾、山口。

弘方摘要 橋岡氏え三円。

五月六日 己丑 火曜 晴。  
橋本宗二郎、橋本雅邦女房と結婚二付、松魚一折、御召縮緬一反を祝ふ。雄児田舎え帰る。

五月七日 庚寅 水曜 晴。  
来客、大坂岡末女。訃音、中村元嘉三女敬子昨午前四時死去のよし、驚愕に不堪。余、業畢而中村氏え行。家内一同のなけき一方ならぬ事也。只涙の外なかりけり。出産は大く安かりしよし。女子誕生、御子も見て参り、能発育もして居られ、よき御子也。尚々いたましき事也。帰途、五軒町を訪ふ。良子典侍様、昨日御下りにて、二週間病後御療養の御つもりとや。暫時御咄し申上て帰る。桃子も同道。敬子霊前え榊料千疋。

\*二週間(二週間)

五月八日 辛卯 木曜 雨。朝より雨降つゝく。

(コノ日、記事ナシ)

五月九日 壬辰 金曜 晴。

午下二時過より閑院宮え詣し、御息所御稽古上て、日暮帰。

五月十日 癸巳 土曜 晴。

午前十時より浅草婦人法話会大会ニ付行。午下一時の集会にて、二時式始り、南条氏説経、石川氏と也。余興、山本氏、末広、三人かたわ。会者八百名と云ふ。畢而会長、幹事、参助員等、夕弁当を喫して帰。基遂殿、姉小路え入駕ニ付、松魚一箱、糸織一反、姉小路家え松魚一箱。

弘方摘要 惣会切符代、二円。凍死者弔慰金ノ内え寄附、二円。

五月十一日 甲午 日曜 陰、くもりかちにて寒さへさむし。

午下二時より、余、桃子、姉小路え行。石山基遂養子に入駕致されたり。来客としては、大炊御門晨子と、媒酌人なりとて梁文と、余等と四人也。淋しき事限りなし。正親町芳子女子出産ニ付、その祝として緋板しめ産衣を贈る。

受方摘要 基遂土産、二円。

\*寒さへさむし(寒冱へ寒し) \*緋板しめ(緋板締)

五月十二日 乙未 月曜 雨。終日雨降り通したり。四十八度にて、綿入重ね着してもまだ寒し。

(コノ日、記事ナシ)

五月十三日 丙申 火曜 晴。四十五度。朝霜ふり、氷を結ふ。不順可驚。

(コノ日、記事ナシ)

五月十四日 丁酉 水曜 晴。

課業畢る。午下二時過より石山家を訪ふ。岡崎忠子様先在り、種々咄して晚餐を喫して、帰。五軒町良子様を訪ふて帰。重威、房州より帰り来る。

五月十五日 戊戌 木曜 雨。

朝より雨一しきりつゝ、豪雨降つゝく。

五月十六日 己亥 金曜 雨、五時頃空晴わたりて、暫時にして又雨降る。

旧四月九日。余の誕生日ニ付、午下二時課業畢而、第四、六教場裝飾して立食場を設ク。塾生一同を饗応す。御すし、御団子、御でん券三枚、おしるこ二枚、右七枚の切手を渡し、各望みのものを食す。実にその雑沓盛ん也。天皇陛下、皇后陛下万歳、学校、師匠、生徒一同万歳、校歌をうたふて、めてたく相済たり。

\*おしるこ(お汁粉)

五月十七日 庚子 土曜 晴。

午下一時より小日向本法寺入仏式に参詣して、帰途淑徳婦人会ニ会して帰。不在中、九鬼鋪子久々にて来る。不逢。夜、中山勝子夫人御死去のよしにて今城友子迎の者来る。直ニ帰邸す。

受方摘要 毛利家、七円五十銭。

五月十八日 辛丑 日曜 晴。

正午より中山邸に行。勝子様病性ハ心臟まひにて、昨午下六時の逝去の事、実にいたしました事也。御暇乞を申して帰る。青山ニ行て、五時頃帰る。

払方摘要 選択四部、二円。御文一部、六十五銭。訓解二円六月分、一円。

\*心臟まひ(心臟麻痺) \*二円(二冊)

五月十九日 壬寅 月曜 終日くもり、夜雨ふる。七十三度。

午下三時より五軒町を訪ふ。典侍様明日御上りのよしニ付、御暇乞に行。五時頃迄四方山の御はなしして帰。一寸基遂子の嫁の事ニ付、一寸吹かけ置たり。橋岡氏来る。

狩野氏、ちゝみ浴衣地。

\*ちゝみ浴衣地(縮浴衣地)

五月二十日 癸卯 火曜 陰晴さたまらず。

皇太子殿下、東北御巡啓御發輦。重たけ、桃子を呼にをこして、この度初女ハ外え縁付るよしと究たるよしにて、先々安心いたし候。小西庸子来りて絹地一枚揮毫する。

\*重たけ(重威) \*をこして(遣して) \*究たる(極たる)

五月二十一日 甲辰 水曜 晴。

来客、石山すま子。謡うたふて帰る。

払方摘要 教行信書(証)、一円三十銭。

\*教行信書(教行信証)

(五月二十二日、二十三日、記載ナシ)

五月二十四日 丁未 土曜 陰、陰りのち晴たり。

午下一時、余、十二号室よりわか書齋え入らむとする椽側にて、わか身より光明はなちたるを見て、実に有難しとも有かたく、何に譬えつへうもなく、嬉しさに、

世の中の嬉しき限り尽してもこの楽しさに及ふへきやは

この嬉しさに、この夜はひねもす寐も得せぬうちに、夜は明たり。

\*椽側（縁側） \*譬えつへう（譬えつべう） \*ひねもす（終日）

五月二十五日 戊申 日曜 晴。

朝九時より観世に別能を見る。

弘方摘要 散敷代、二円。

\*散敷（棧敷）

五月二十六日 己酉 月曜 晴、夜雨。

来客、横浜渡辺玉子、庸子退校の御礼に来る。わか園中桂の大樹を閑院宮殿下ニ献上の約束いたしたるを、この朝植木師八人來りて、終日かゝりて漸車に乗せる様にいたり。渡辺氏、せる地。

受方摘要 渡辺氏、十五円。

\*いたし（致し） \*せる地（セル地）

五月二十七日 庚戌 火曜 雨、細雨已而やむ。

朝、昨日の植木や大せい來りて、漸車にのせて牛引て行たり。容易ならぬさわきなり。

受方摘要 酒井夏子、五円。

五月二十八日 辛亥 水曜 晴。

地久節、休業。余、桃子と十時の本所汽車にて佐倉堀田家喪中御見舞旁訪問す。十二時着。御夫婦様に御目もいたし、真信往生の御模様を承る。御棺の廻り、其間に光明満々たり。たれも恐怖の思ひをなしたり。種々御咄し共承はる。五時四十分の汽車にて帰る。少し雨ふり出したり。堀田家出立の時は雨やみたり。本所着の節ハ、東京はよほとふりたりと見えて道あし。

受方摘要 堀田家、七円。

弘方摘要 堀田次え、二円五十銭。汽車代、三円。人力代、九十銭。弁当代、廿銭。

\*いたし（致し） \*道あし（這悪し）

五月二十九日 壬子 木曜 雨、午下雨晴たり。

訃音、正二位伯爵宗重正儀病氣之処養生不相叶、廿五日午後二時薨去被致候。此段御通知

申進候也。追而六月三日午後一時出棺之事。汲泉雜誌第五号出来、直ニ配布す。

五月三十日 癸丑 金曜 雨、終日雨降しきる。

受方摘要 会計より三ヶ月分請取、三十円。

払方摘要 二月、三月、四月雑費、五十四円廿五銭。

五月三十一日 甲寅 土曜 雨、雨降しきる。

(コノ日、記事ナシ)

五月會計

〳五月分雑費相済。拾八円三拾五銭也。

(六月)

六月一日 乙卯 日曜 晴。

朝九時より余、栄子と同じく觀世会行、終日能を見て五時過帰。宗家香料金千疋。

六月二日 丙辰 月曜 晴。

課業畢る。橋場小松宮様ニ詣し、大御息所ニ拝謁して、徳水ニ而種々御咄し申上て去る。宗家え弔詞ニ出る。

(六月三日、四日、記載ナシ)

六月五日 己未 木曜

田村氏より、[ふらねる](#)一反。

受方摘要 深谷藤七郎、二円。

\*[ふらねる](#) (フラネル)

六月六日 庚申 金曜 雨。

課業畢る。閑院宮様え参りて御教授申上て、志賀氏を問ふて、日暮帰宅する。大炊御門家政見舞ニ来たる。安田輝子。槐中桐五重箆筒一箇、金三拾三円也。牛込改代町木地屋庄太郎。

受方摘要 堀田家より三円。

払方摘要 箆筒代、三十三円。

六月七日 辛酉 土曜 雨、午下晴わたりて又五時頃より雨にて、夜の雨おそろしき迄ふりたり。

朝より南条氏を訪ふ。在宅にて種々閑話して帰。袷に袷羽織を着しても尚寒し。来客、石山基顕。愛治郎快気祝、むし物、松魚配布する。

六月八日 壬戌 日曜 晴。

朝九時より観世舞台開より一周年の祝ひ能見物する。此日の見物人の多き、実に立錐の地もなきに、暑さも九十度近きかと思はれたり。

弓八幡 山階

実盛 木下

班女 三井

七騎落 観世

春栄 三井

正栄 片山

愛治郎快気祝、松魚、むし物を配布する。

弘方摘要 観世え三円。

\*正栄(正尊)

(六月九日、十日、記載ナシ)

六月十一日 乙丑 水曜 入梅 晴。

午下二時より南条博士を招きて道德講演あり。生徒一同悦んてきく。

\*きく(聴く)

六月十二日 丙寅 木曜 晴。

有約、午下二時より余、桃子、小西庸子と同しく小梅の停車場に行。千家信子先在、やかに安田善治郎、房子、暉子、さた子来られて、幸、堀切に同道する。三時の汽車にて、三停車場を経て堀切に至る。車にてむさしやに着。菖蒲は見頃なから、廿年間もみざるに、菖蒲半少くなりて休所のみ数ふえたり。風景そんなり。みるへくもあらず。小高園に行て見る。こなたハあやめも多くてやゝ見処あり。しはらく逍遙して、また車にて本郷吉野園に行。こゝははじめてみる。主人も来りて嬉ひ、奥なる新築の坐敷開きをたの(し)みたり。園主ハもと安田家の銀行員とかや。この地所ハ一万坪も有て、四季の花ものを植たり。今夏艸の盛りにて、実にわか志を得たり。またそれより向島の花月花たんに行。晚餐洋食の饗応せられたり。ゆるく遊ひて、月七日の影、川に移りて、えも言ひかたき迄なり。八時頃、皆々と間を告てわかれたり。すた堤の葉さくらに月影見えて、こゝちよくかへりたり。

\*幸(さいはひ) \*むさしや(武蔵屋) \*みざる(見ざる) \*そんしたり(損じた  
り) \*嬉ひ(喜ひ) \*わか志(我が志) \*花たん(花壇) \*移りて(映りて) \*  
いと間(暇) \*すた堤(隅田堤)

六月十三日 丁卯 金曜 朝雨しきりなり、雷も交りたり。

有約、午下三時より余、桃子と同道にて、加茂氏送別会ニ付階行社ニ行。大相摸の余興ア  
リ。おもしろく見たり。此間雨もやみたり。畢而立食饗応済て帰。

\*階行社(偕行社) \*大相摸(大相撲)

六月十四日 戊辰 土曜 晴。

午下早々觀世ニ行、素謡会聴聞する。もゝ子も来りて、四時頃帰。加茂巖雄氏、此度渡米  
に付、すきや別織一反餞別する。来客、夜、玉枝。

弘方摘要 觀世会費二人分、六十錢。

\*すきや(透綾)

六月十五日 己巳 日曜 雨、終日雨つゞく。

巖父の御祥月ニ付、祭典執行する。雨なから午下早々墓参して帰。はし岡きたる。来客、  
小西つね子。

受方摘要 軍事利子、七円余り。

\*はし岡(橋岡)

六月十六日 庚午 月曜 朝よりいとほそき雨、ふりたりやみたりさためなし。

法のみちわか身の外になきものを遠しとこそハおもひけるかな

六月十七日 辛未 火曜 雨、ふりてり定めなき。月はしめて清光なり、こゝちよし。  
習字試験行ふ。

弘方摘要 夏の前かけ、六円五十錢。

\*ふりてり(降り照り)

六月十八日 壬申 水曜 雨。

画の試験を行ふ。

六月十九日 癸酉 木曜

試験行ふ。

六月二十日 甲戌 金曜 雨。

弘方摘要 福知つるより白縮緬裾よけ、四円八十銭。

六月二十一日 乙亥 土曜 晴。

加茂巖雄氏、此度欧行ニ付、暇乞に来る。午下、錦輝館ニテ東亜仏教会ニ行、四時過帰。万国郵便聯合加盟廿五年祝典紀念日ニ付、端書往来ひんはん也。

平田三枝子より羽二重一反。

受方摘要 平田三枝子、三円七十五銭。

\*ひんはん(頻繁)

六月二十二日 丙子 日曜 晴。

午下四時より長尾収一氏をはじめて招く。家内一同面会す。晚餐を饗す。八時過まで種々の談話有り、帰られる。姉小路典侍さまえ書をよす。午下、中山侯喪中訪問す。正子さま、栄子さまとはらく御咄しして帰。

六月二十三日 丁丑 月曜 晴。

朝八時前、地震。

六月二十四日 戊寅 火曜 晴。

受方摘要 山崎節子、二円。

六月二十五日 己卯 水曜 晴。

朝五時より氷川神社に参詣して帰。

官報号外、

東宮殿下妃、今朝七時三十分王子御降誕。

実にわか国の栄とてかしこみうれしみ、是に過たるはなし。千葉香取郡山田角次郎とやり、書及香取郡誌一部贈り来る。

六月二十六日 庚辰 木曜 雨、細雨ふるかとすれはまたやみぬ。

朝五時、一年、二年生徒を連て、氷川神社に参詣して、近方逍遙して帰。午下五時、長尾収一氏来りて、生徒ニ衛生談あり。麦飯機能を懇々とのへられたり。訃音、小西有勲昨午後五時卒去、廿八日葬送。

\*近方(近傍) \*のへられ(述べられ)

六月二十七日 辛巳 金曜 雨。

午下二時より閑院宮に詣し、御稽古申上候帰、帰途愛国婦人会事務所寄而帰。来客、石山吉子、基弘児、駒附添て始而来る。不在にて不逢。



六月二十八日 壬午 土曜 雨。

加茂巖雄氏渡米二付、桃子送別、横浜迄行。小西有勲葬送、星代理す。香取山田秋雲氏え書を寄す。箱根塔の沢なる鈴木善左衛門氏え哥を贈る。

六月二十九日 癸未 日曜 雨、終日やみなし。

三浦伊八、午飯後俄然腹痛、古血かたまり吐出し、井深氏来り。注斜いたし、全く胃岳破裂にて、種々手当をほとこし、早速悴を呼出し、釣台にて自宅ニ帰る。途中をも危驗と存、井深氏附添て行、先々安着いたり。夜ニ入て、星氏厚徳会より見舞金五円を出し候。此時、元氣も出たるよし、咄しもいたし居られ候よし也。桃子、日暮横浜より帰る。

受方摘要 閑院宮様より三十円。

\*注斜(注射) \*胃岳(胃癌) \*危驗(危険)

六月三十日 甲申 月曜 雨。

授業半日間執行。

平田氏より、御羽二重一反。

受方摘要 平田三枝、二円五十銭。

払方摘要 橋岡え金三円。

六月會計

六月分雜費、金貳拾七円三拾七銭也。

(七月)

七月一日 乙酉 火曜 乙酉 雨。

第二皇孫御命式二付、朝七時生徒一同第六教場ニ着席。君か代三度、畢天皇后兩陛下、皇太子同妃兩殿下、第一皇孫第二皇孫兩殿下万歳を唱えて、一同休業す。御名雍(ヤス)仁、御称号淳宮。書經ニ黎民維雍德淳の古典より出たる也。

\*〔淳(アツ)〕宮

七月二日 丙戌 水曜 丙戌 雨。

来客、横浜広瀬氏妻。

広瀬氏より縞物一反。

受方摘要 藪カネ、吉田カタ、生源寺イサ、樹下サダ、大東トヨ、十五円。  
払方摘要 卯都宮高え六月分、五円。大和田氏六月分、千疋。

\*卯都宮(宇都宮)

七月三日 丁亥 木曜 雨。朝よりの雨降通して、夜通し降つゝく。  
(コノ日、記事ナシ)

七月四日 戊子 金曜 雨、八時頃より空晴れわたり、可喜。  
朝、雨甚し。八時頃、一天晴わたりて、雄児準備いたして、正子、**重たけ**附添て本所十二時汽車にて市川長尾氏え養子に遣す。**重たけ**四時頃帰、雄児ハわか家に帰りたる様なる悦にて、大ニ機嫌よろしきよし也。訃音、若林勝賢昨夜十時頃死去。  
跡見三次郎え**すきや**一反祝ふ。若林え香料、金二円。

\*重たけ(重威) \*重たけ(重威) \*すきや(透綾)

七月五日 己丑 土曜 晴。

大倉利三郎追善会二付、二円贈る。午下早々三井得右衛門氏え行。素謡半歌仙にて、八時頃田番済て帰。正子、長尾氏より帰る。来客、井上市兵衛、反物も贈る。

田村氏より日の出御召一反。

払方摘要 大倉氏え二円。

七月六日 庚寅 日曜

終日揮毫する。来客、横浜小野妻及くわ子、退校の御礼ニ来る。  
小野氏より縞もの一反。

七月七日 辛卯 月曜 晴。

御所藤袴典侍様より今日午後一時頃より参れと仰せられ候二付、同時刻より参り、早速御目もし申上で、種々ゆる／＼と御咄し致し、御間の御ものもいたゞきて、四時頃下る。時、雨ふり出し、**なる神**もあり、帰宅の頃漸雨もはれたり。正子、八時の汽車にて市川長尾氏え行、六時頃帰宅いたし、雄児もやゝ数さまになつき候よし、先々安心いたし候。長尾氏も昨日行軍より帰着いたし、万端安心候。

受方摘要 園祥子、三円。森両人、五円。姉典侍、七十五(錢)。

払方摘要 姉家来え五円。

\*なる神(鳴神)

七月八日 壬辰 火曜 晴。

(コノ日、記事ナシ)

七月九日 癸巳 水曜 晴。

正午より、余、桃子と同道にて、上野美術学校二行、生徒の製作物一々縦覧する。日本画に至りては、ほとんど見るべき物なし。已而帰。

田村氏より、紋御召一反。

受方摘要 三条家、十円。上杉氏、一円。

払方摘要 買物種々、一円七十銭。

七月十日 甲午 木曜 晴、午前より俄然雨降り出したり。

訃音、佐々木高行嫡子高美八日卒去、十二日午前八時葬送也。

七月十一日 乙未 金曜 晴。

来客、横浜原氏より使井上氏。入塾、向山くら子。

受方摘要 原氏より三十円。向山氏、一円。今城友、二円五十銭。

払方摘要 買もの、五円。

七月十二日 丙申 土曜 晴。

中元の進物ものこしらへて方々え配らたり。

戸田氏、御召一反。

受方摘要 戸田氏、七円。斎藤梅子、十円。

\*こしらへて(拵へて) \*配ら(配り)

七月十三日 丁酉 日曜 晴。

来客、中村元嘉氏。午下一時、下谷久保扶桑氏官舎に行。佐藤静子両家よりの招待にて、桃子同道也。婦人方の素謡会六番。男席楼上にて二組、梅若万三郎、六郎、観世鉄之丞、織雄も来り、夜十時帰。此時、少々雨ふり出たり。

受方摘要 松平★(金十米十夕十年)、栄、五円。五軒町、二円五十銭。安田暉、三円。払方摘要 観世九番ゆるし、千疋。

七月十四日 戊戌 月曜 雨。

来客、毛利万子、いく子、岩浪稲子、安田暉子、吉見辰子同姉と、六時頃迄種々咄して帰らる、万子様、桜川一番御謡二相成たり。

七月十五日 己亥 火曜 雨。

来客、田中久右衛門。

受方摘要 田中貞子、五円。

七月十六日 庚子 水曜 雨、朝より雨ふり通したり。

課業畢る。午下早々中元ニ出る。閑院宮様え参る。御息所君に拝謁して、ゆるく閑談して、三条家え参る。治子様、篤子様と種々御咄し申上で、佐々木高美弔詞をのへて、九条家え参る。恵子様と暫時にして、戸田家え行、極子、米子、幸子と暫時談話して帰。受方摘要 三条家、五円。

七月十七日 辛丑 木曜 雨。

(コノ日、記事ナシ)

七月十八日 壬寅 金曜 雨。

(コノ日、記事ナシ)

七月十九日 癸卯 土曜 陰、雨なし、陰なり。  
午下早々青山より新宿石山氏を問て、夕景帰。弘帰り来る。

七月二十日 甲辰 日曜 晴、朝晴、午下又雨ふり出して。

朝八時より田村長子と約ありて梅若に能を見る。

受方摘要 北白川宮、三円。

七月二十一日 乙巳 月曜 土用入。朝雨又ははれ、陰かちなり。

来客、万伯。

\*かち(勝ち)

七月二十二日 丙午 火曜 陰。

朝墓参して帰。

弘方摘要 宇都宮え、五円。

七月二十三日 丁未 水曜 雨、終日細雨ふり通したり。

土用三郎にふらねるに羽織着たり、可驚。

\*ふらねる(フラネル)

七月二十四日 戊申 木曜 朝雨、十時頃より空晴て、漸暑中らしく相成たり。八十四度。課業畢る。授業納をなす。塾生、午下より帰省する者六十人計。午下五時頃、三浦猪八死去す。

七月二十五日 己酉 金曜 晴。はしめて八十九度、熱甚し。堪かたく覺たり。午下、夕

立雨ふり出したり。やかて晴。

塾生続々帰省す。来客、松平鞆子、佐藤静子、山本久子。

七月二十六日 庚戌 土曜 晴、度々細雨ふる。

来客、佐野信子、斎藤常子、葉室後室、俵松子、姉小路基遂。午下、田村氏え訪問す。  
弘方摘要 [はし岡](#)え三円。

\*はし岡(橋岡)

七月二十七日 辛亥 日曜 雨。

来客、赤松澄子。弓術会催す。[浜の](#)、小林、多、橋岡来る。午下四時迄、先々陰なからの  
天気にて、また細雨降出して、会全畢。

\*浜の(浜野)

七月二十八日 壬子 月曜 雨、陰雨定めなし。

(コノ日、記事ナシ)

七月二十九日 癸丑 火曜 雨。

地方え暑中見舞小包にて贈る。濃州遠藤氏、青木氏、唯専寺、寺田、田中、御寺御所、木  
田氏、辻八千、水薬師寺、札幌観世え。

七月三十日 甲寅 水曜 朝雨、ほとんど晴て、終日陰晴定まらず。

来客、川崎松子。午下早々毛利様え暑中訪問す。昨日より約ありて御待かねにて、安子様、  
万子様御目もし申上で、程なく御謡始りて、先熊野、万子様御わき、余して、飯田地、又蟬  
丸、万様[せみ](#)、余して、飯田わき、安子様御仕舞拝見する、万さまも。余、二番つゝいたし  
候。御会食になりて、女中の長うた及手おとりにて面白き事也。夜に入て八時頃帰。

\*せみ(せみ丸)

七月三十一日 乙卯 木曜 卯 晴、天晴朗。八十二度。

方々え暑中見舞の書を寄す。

七月會計

弘方摘要 雑費金三拾三円九拾壹錢也。

(八月)

八月一日 丙辰 金曜 晴。八十八度。風有。

桃子、栄子、鶴子、君子、朝五時出門にて房州に行。六時十分の汽船二乗す。風有。午下二時、無事勝山ニ上ル。上野美術協会より招待ニ応して行。六書震覧会第一会、参校品も沢山集り、可観者甚多し。暑中銷夏の一逼也。ゆる／＼楽しんで縦覧して帰。  
\*六書震覧会(六書展覧会)

八月二日 丁巳 土曜 雨、朝より雨ふり出したり。

朝、氷川田甫散歩して帰。園中ニテ弓術の会日なから、雨にて止。万里家嘉六房州より帰り来りて、昨日かち山迄も風もおたやかなから、俄に風替りて、かち山より上陸して、こゝには人車なくて、北条え電報懸て車を呼ふ。八時万里家え着す。桃子より書を持参す。

\*かち山(勝山) \*かち山(勝山)

八月三日 戊午 日曜 雨、終日終夜雨降通したり。

朝、堀田伴子より電話にて可来と云ふ。昼早々雨中出かけて行。御夫婦、和さまも御目にかゝりて、結構なる御咄しあり。四時半帰る。

拙方摘要 訓解二冊、一円。

八月四日 己未 月曜 雨、朝豪雨はてしなし。雷鳴あり。

終日揮毫ものする。書を寄す、九戸え。

八月五日 庚申 火曜 雨、朝よりも細雨降つゝ。空一面に晴わたりて、暑さ覚える。

朝、閑院宮様ヨリ一昨三日午前八時十分王子御分婉のよし申来る。実に御めてたき事限りなし。来客、山中幸子。午下、閑院宮様に詣して恐悦申上る。御産の御模様も至極御安産、御催しの間も極々御みじかくて、する／＼御誕生あらせられたり。王子様も見上たる処、よく／＼御発育被遊、宮様によく移らせられ、御相も至極御威光赫々たりと見上たり。御祝酒も戴て去る。北白川宮様えも参りて、暫時閑話して帰。

受方摘要 田中光子、三円。

八月六日 辛酉 水曜 晴。八十八度。

午下三時より三井得右衛門氏二行。素謡会。余、三井寺謡ふ。八番有て、後一調数番なれと、九時二帰。

八月七日 壬戌 木曜 雨、終日降通し。

書至、九軒。乃九軒え書を寄す。

八月八日 癸亥 金曜 雨、終日降通したり。  
書をよす、八軒え。地震。

八月九日 甲子 土曜 雨、午後より空晴わたりたり。  
安倍基安新夫婦来る。角田栄子。

八月十日 乙丑 日曜 晴、夕かたより又細雨降出したり。  
朝、始而日輪を拝し、珍らしく。朝、氷川神社ニ詣る。たま／＼の天気故、洗濯する。ほしものする。車力出る。いつこも大／＼賑々しく覚ゆ。選挙当日也。来客、石山すま子、一宿。

八月十一日 丙寅 月曜 雨、終日雨降通したり、夜も強雨降つゝく。  
朝、陰りながら、余、すま子と同しく、氷川神社ニ詣す。すま子、昼前帰られる。

八月十二日 丁卯 火曜 雨。  
書をよす、七軒也。下婢吉谷藤、始而目見する。

八月十三日 戊辰 水曜 晴、はじめて月影を見、嬉しさよ。  
下婢神奈川の琴、宅え帰す。訃音、太田信義実弟義次死去、直ニ弔詞を出す。来客、石山基頭、博文館編輯員苦米地治三郎。

八月十四日 己巳 木曜 陰。  
電報、房州桃子より、一時着迎頼む。来客、大炊御門氏。二時、桃子、栄子、鶴子、無事帰着する。

八月十五日 庚午 金曜 陰。七十度。

朝、鳥尾氏を問ふ。智勢子女子**妨婉**二付、緋の**友仙**、松魚一箱を祝ふ。姑及光夫婦にも逢ひ、出産の嬢高子にも初対面する。よく発育も出来てよき子也。暫時咄して、それより閑院宮様え参り、**友仙縮緬**御産衣、松魚一折を祝し奉る。春仁王様見上而帰。橋岡氏、鎌倉より帰り来る。岡崎忠子さまも御出有たり。夕月清光、余、桃子と五軒町を問て帰。

\***妨婉**(分婉) \*友仙(友禅) \*友仙縮緬(友禅縮緬)

八月十六日 辛未 土曜 陰。七十度。  
終日揮毫する。来客、角田栄子。書をよす、万里小路え。

八月十七日 壬申 日曜 晴、陰晴さたまらず。七十三度。

終日揮毫する。来客、原田二郎、其外弓の朋五、六人。  
受方摘要 原田潤筆、十円。

八月十八日 癸酉 月曜 晴。  
昼早々麻布え行、四時過帰。

八月十九日 甲戌 火曜 雨、終日雨降りつゞく。門軸迄水ひたす。  
午下、石山すま子、岡崎忠子、橋岡氏も来りて素謡会執行す。名々独吟等にて、夜十時迄。  
すま子、忠子一宿。

\*名々(銘々)

八月二十日 乙亥 水曜 晴。  
朝よりもまた謡ありて、昼前帰られる。弓術会にて、十五、六人来りて終日盛会なり。来客、安田暉子、諏訪。日暮て帰られる。

八月二十一日 丙子 木曜 晴。  
約の如く、堀田伴子、松平鞆子、岩浪稲子、藤女、朝十時頃来られて、久々の閑談、実におもしろく、午餐を饗して種々咄しのみ。午下七時頃、皆々帰られる。此時、堀田家老女藤尾病氣危篤の電報のよしにて、直二佐倉え帰られる。  
受方摘要 堀田氏、二円五十銭。

八月二十二日 丁丑 金曜 晴。  
(コノ日、記事ナシ)

八月二十三日 戊寅 土曜 晴。  
泰、一番汽船にて渡房する。

八月二十四日 己卯 日曜 晴。  
払方摘要 橋岡え一円五十銭。

八月二十五日 庚辰 月曜 陰。  
奥及我居間十二号共、大掃除、干物する。

八月二十六日 辛巳 火曜 雨。  
(コノ日、記事ナシ)



八月二十七日 壬午 水曜 晴。  
来客、五島御夫婦。  
島津田鶴子より紺かすり一反。

八月二十八日 癸未 木曜 晴。八十六度。  
朝より弓術会催す。十五、六人会す。来客、すま子、一宿。書をよす、島津田鶴子、鳥尾智勢子、長谷川幸子。

八月二十九日 甲申 金曜 晴。八十八度。  
すま子、朝十時頃帰宅す。

八月三十日 乙酉 土曜 晴。九十二度、当年第一の暑さ也。

朝、長尾賀寿子、雄児を連れて来る。もはやよくあゆむ。物事よくわかり、母二よくなつく事、可驚。午下四時帰。余、二時半より新橋二行。小松宮殿英国より御帰京二付、奉迎申上ル。三時四十五分御着。御機嫌御うるはしき御様子伺て安心す。奉迎之人々実にすまましき事也。来客、下連城女熊谷春子、久々尋ね来る。余、不在ニテ不逢。

熊谷春子、[長州ちゝみ](#)一反。

\*[長州ちゝみ](#) (長州縮)

八月三十一日 丙戌 日曜 晴。

来客、浜野章吉娘くわ、裁縫助教之為、目見ニ来る。

(八月会計、記載ナシ)

(九月)

九月一日 丁亥 月曜 晴。

帰塾、第一島田静子新島より、第二赤池まさ子。

(九月二日、記載ナシ)

九月三日 己丑 水曜 晴。八十五度。

午下四時より三井得右衛門氏に行。素謡、一調等にて、夜九時帰。来客、忠子、すま子。

九月四日 庚寅 木曜 晴。八十五度。

塾生追々帰る。

九月五日 辛卯 金曜 晴、夕立雨さつと降て直二晴。  
朝より塾生追々帰る。

九月六日 壬辰 土曜 晴雨無究。八十五度。  
授業始をなす。通学生大略集る。塾生四十八名。新入生四名。  
吉沢氏、湯染一反。

\*無究(無極)

九月七日 癸巳 日曜 雨、朝より晴雨定まらず、夜も豪雨。八十八度。  
来客、原安子、青木幾恵、退校の御礼ニ来る。

受方摘要 原氏より五十円。  
弘方摘要 橋岡え八月份、四円。

九月八日 甲午 月曜 雨、朝より雨晴定まらず。八十五度。  
愛治郎、弘連て石山家に行て帰。  
田村氏よりふらむねる。

\*ふらむねる(フランネル)

九月九日 乙未 火曜 雨、朝雨、午下晴たり。八十八度。  
午下四時、泰、房州より帰宅する。

九月十日 丙申 水曜 雨、晴雨定まらず。八十六度。  
氷川神社祭礼ながら、実ニ質素なり。朝、氷川え参詣して帰。

九月十一日 丁酉 木曜 晴、本天候らしく覺えたり。  
(コノ日、記事ナシ)

(九月十二日、十三日、記載ナシ)

九月十四日 庚子 日曜 晴、雨もありたり。八十五度。  
余、桃子、正子と觀世装束能始に行。四時畢而帰。

弘方摘要 觀世能場代九、十、十一、十二、四ヶ月分、六円八十錢。

九月十五日 辛丑 月曜 晴。

余、正子と同じく、俄におもひ附て、朝十時五十分飯田町汽車にて国分寺秋草見て来んと出かけたなり。大久保わたりより所々秋の草花みながら、十二時廿分国分寺停車する。柳やといふに憩ひて、**ひるけ**をすまし、車をつれて、国分寺跡なる薬師堂二詣して、此山をたとり行。実に千種の花の咲出たるあやにしきとも、萩、すゞき、女郎花、**わりもつこう**、撫子、おのかまゝなる、ゆけとく限りなく、虫の声々も皆われを迎へて、**えもいはぬ**秋のけしきなり。元の**七堂迦らん**の礎などにこしうちかけて、此まゝを写生したり。はた古瓦布目なる甘筒はかりも、車夫等ほり取たり。夫よりムクウ村の貫井神社祭礼にて、太鼓の声などおもしろく、山の上に池ありて清水湧出、滝もあり、ゆるく遊ひながら、もとの柳やに帰りぬ。折しも米倉千賀子、米子児を連れて来り、珍らしくも逢ひたるものかな。共に五時廿分の汽車に打乗て帰りぬ。**まつ宵**の月もさやかに、汽車中もはなしながら帰宅す。国分寺ハ聖武天皇の御代建立のもの、古瓦は千余年のもの也。仁田役兵燹二罹り烏有に帰して、今ハ仁王門のみ残り。

払方摘要 国分寺行雑費、四円廿銭。

\*みなから (見ながら) \*ひるけ (昼餉) \*わりもつこう (吾亦紅) \*えもいはぬ (えも言はぬ) \*七堂迦らん (七堂伽らん) \*まつ宵 (待宵)

九月十六日 壬寅 火曜 晴、さつと雨もあり。八十五度。

仲秋明月。月光ながら、折々雲かゝり、**更たけて**最鏡の如し。

\***更**(ママ)たけて

九月十七日 癸卯 水曜 晴。月すみわたりて面白く観る。八十二度。

来客、伊藤篤太郎。

九月十八日 甲辰 木曜 晴。八十二度。

志賀氏来られる。鳥島実見の演舌有り。

九月十九日 乙巳 金曜 晴。八十度。

午下、石山氏を訪問して、閑院宮え詣し、御息所御前にて、春仁王様の御様子も見上る。御庭を姫宮様方と逍遙して、自分より献上したる桂の木よく植附たり。松井氏にも逢ひ、御庭の模様もよく石の位置もよくなりたり。御合のものいたゞきたるうち、雷鳴夕立して四時過る頃小雨になりて、御暇申上て帰る。小石川わか門前、川の如く水にひたしたり。此辺は雨強かりしと覚ゆ。夜月清く、くまもなく、雨後の気色更に珍らし。十一時頃庭に出て、月夜の景色二、三を写す。

九月二十日 丙午 土曜 晴。八十度。

朝、冷氣を覚ゆ。夜、余、桃子と同しく本郷辺道遥す。月出影清く、秋なる哉。弘方摘要 瀬戸物六箇、八十錢。弘え五十錢。

九月二十一日 丁未 日曜 七十八度。  
来客、小西庸子。

九月二十二日 戊申 月曜 雨、終日細雨ふる。  
朝墓参して帰。此日を以て、授業午後二時迄とする。先祖祭執行す。重威、幾子来る。生徒其外一同、供養する。

九月二十三日 己酉 火曜 陰、夜細雨もあり。  
来栖荘兵衛、妻及篤子退校の御礼ニ来る。

九月二十四日 庚戌 水曜 晴。八十五度位。  
秋季皇霊祭。午下、観世に素人能執行。午下見物する。

九月二十五日 辛亥 木曜 晴。  
来客、忠子、すま子、一宿。

九月二十六日 壬子 金曜 雨、夜豪雨降つゝきすさまし。  
来客、支那人任憲吉。学校参観、諸教授を見て、点茶法を親しく見、琴調を聴たくとて、齋藤梅子、串田茂子、夕顔を調ふる。種々感佩之至也とて、十一時過去る。朝、忠子、すま子帰られる。

九月二十七日 癸丑 土曜 雨。

(コノ日、記事ナシ)

九月二十八日 甲寅 日曜  
山口文子、当日死去。

(九月二十九日、三十日、記載ナシ)

(九月會計、記載ナシ)

(十月)

十月一日 丁巳 水曜 雨。  
(コノ日、記事ナシ)

十月二日 戊午 木曜 雨。  
(コノ日、記事ナシ)

十月三日 己未 金曜 晴。  
(コノ日、記事ナシ)

十月四日 庚申 土曜 晴。昨夜また大雨。

(十月五日〜七日、記載ナシ)

十月八日 甲子 水曜 晴、夜雨。  
午下より素謡会を催す。来会者、毛利万子小督、大村梅子、安田暉子、福田芳子葵上、岡崎忠子柏崎。

十月九日 乙丑 木曜 晴、夜雨。

朝より**文部所**視学官四人来り、校の教授よりすへて委しく見て帰られたり。

\***文部所**(**文部省**)

十月十日 丙寅 金曜 晴。

朝五時起て仕度、新橋七時廿分の汽車、小松宮御息所殿下成らせられたり。程なく汽車に召され、お供する。久々の三島行、すへて珍らしく、此汽車中も種々御咄しのうちに、二時廿分御着。人車にて御別邸御着。宮殿下ハ五日前より成らせられ、**御待請遊**はされ、こたひの三ツは四ツはの大殿造り、**好き**をこらさせ給ひたるを、余等に御案内遊はされ、世の外なる思ひをなしぬ。此日ハ、御地所の元御養蚕所を高等女学校に御かしあたへられたる女学生の、園遊会を御催し遊はされて、午下二時より、生徒、教員たち来りぬ。御庭にて御両所成らせられて、拝謁を賜りたり。所々に**かけ茶屋**を設けて、**御しる子**、そば、うどん、御饅などを下され、四時過る頃一同散したり。有かたき思し召なり。

\*御待請(御待受) \*好き(数奇) \*かけ(掛) \*御しる子(御汁粉)

十月十一日 丁卯 土曜 晴。  
(コノ日、記事ナシ)

十月十二日 戊辰 日曜 晴。  
朝ハ御薄茶ニテ、替々の手前にて御茶戴き、午下は御庭にて栗ひろひ。一斗の余も取りたり。御庭の一面を拝観する。半日の御庭遊ひなり。月は夜毎々に清く、夜の不二などはしめてみたり。

十月十三日 己巳 月曜 晴。

朝より御庭にて御写真遊はされて、皆々撮影する。余に不二見の滝をみてよと仰せられ、三島停車場より五丁程の所にて、今は公園に成りたり、元は鮎壺の滝とて、箱根湖水より流れ来る水にて、日光慈観の滝の様にて、上一面の巖石より落くる滝にて、上の川より鮎の流れ来りて滝壺に落ちる也、故に鮎壺の滝と名付たると云、今ハ不二見の滝とて、滝の真上に不二の嶺見ゆる也。此頃は四筋に落ちたり。五月雨の頃は五筋、六筋と落ちるよし。二処程写生して帰。

十月十四日 庚午 火曜 晴、夜雨降。殊にあつし。

明日は御出発の御名残とて、種々の御遊ひも遊はされて、九時臥。  
弘方摘要 三島名物神代杉下駄代四足、一円十銭。

十月十五日 辛未 水曜 晴。あつし。汽車行中扇ならし通したり。袷にて汗にひたしたり。  
朝十時廿分三島汽車ニテ両殿下御帰京御供申上ル。三時三十分、新橋御着。正子、栄子、鶴子迎に来る。

十月十六日 壬申 木曜 午下四時頃より雨降り出し、夜通し降つゝく。

課業如例。志賀氏、瀬戸の来歴を話す。姉小路家、大職官祭典に参詣す。

弘方摘要 次え土産、二円。

\*来歴(来歴) \*大職官(大織冠)

十月十七日 癸酉 金曜 雨、終日豪雨、夜月は尤清し、昼の如し。神嘗祭。風雨甚し。  
(コノ日、記事ナシ)

十月十八日 甲戌 土曜 晴。

午下早々小松宮様え参り、夕景帰宅す。

十月十九日 乙亥 日曜 晴。

酒井家御産の御祝ニ出ル。緋友仙御産衣、松魚二円を右御祝ニ上る。

\*緋友仙(緋友禪)

十月二十日 丙子 月曜 晴。

(コノ日、記事ナシ)

十月二十一日 丁丑 火曜 晴。

(コノ日、記事ナシ)

十月二十二日 戊寅 水曜 晴。

来客、埼玉県増田竹、久々にて訪問す。

十月二十三日 己卯 木曜 晴。

朝、上野白馬会二行、縦覧して帰。

十月二十四日 庚辰 金曜 晴。

朝、支那人五名參觀ニ来る。

十月二十五日 辛巳 土曜 雨、終日細雨降通し。

課業畢る。帆引氏の**鷺箋**半切書画二枚、画帖もの二枚揮毫す。白井藤太郎母死去ニ付、田詞出す。小川定夫、虎病にて去る十七日死去之訃音来る。依而弔詞を出す。

\*鷺箋(画牋) \*小川定夫(小河忠夫)

十月二十六日 壬午 日曜 雨。

(コノ日、記事ナシ)

十月二十七日 癸未 月曜 晴。

生徒運動会を催す。通学生徒は自弁持、寄宿生は内こしらへの弁当なり。九時揃にて、畑田村氏の別荘かり請る。庭の芝生に敷ものをしき、或は床几など所々に設け、種々様々の遊戯など思ひくになし、弁当を開き、又午下二時頃、田村氏よりの菓子一同え贈られたり。空の**あんしけ**なし。ゆるく楽しみ、実に気楽一方にて、生徒も十分の楽しみ。三時より帰途につく。四時帰校す。

\*畑畑(田端) \*あんしけ(案じ気)

十月二十八日 甲申 火曜 晴。

草臥やすみ執行す。午下、田村氏え御礼二行。桃子も来りて夕餐を饗せられたり。八時帰。

(十月二十九日〜三十一日、記載ナシ)

(十月會計、記載ナシ)

(十一月)

十一月一日 戊子 土曜 雨。  
生徒、午下より過半帰宅す。

十一月二日 己丑 日曜 雨、雨終日降通したり。  
余、正子、桃子と觀世会に行、日暮帰宅す。日清戦争戦死者の骨を護国寺え埋葬するてふ、その行列立派なるを、雨中皆々ぬれつゝ送られたり。觀世の楼上より見る。

十一月三日 庚寅 月曜 天長節 晴、やり雨はれたり、午下又雨ふりてすくやみたり。  
朝九時、生徒一同講堂楼上に集めて君か代を歌ひ、両陛下、皇太子、妃殿下、皇孫殿下の万歳を唱ふ。余、正子と久米氏え招かれ、久米能楽開に石橋を舞はれたり。日暮て帰る。  
夜九時より、余、桃子と外務大臣の招により、帝国ホテルにて夜会に参集する。一時帰宅す。

\*すく(直)

十一月四日 辛卯 火曜 晴、昨夜又大雨ふる。

(コノ日、記事ナシ)

十一月五日 壬辰 水曜 晴。

来客、読売新聞記者箕輪鉄司。

弘方摘要 田中氏本代、五十錢。

十一月六日 癸巳 木曜 晴。

(コノ日、記事ナシ)

十一月七日 甲午 金曜 晴。

陛下大演習の為、九州地方え御発輦あらせられる。

十一月八日 乙未 土曜 晴。

午下三時より三井得右衛門氏え行。夜八時過、帰宅す。書至、岩倉梭子。



十一月九日 丙申 日曜 晴。  
朝九時より講堂楼上にて、台子たて、三組場所をしつらひて、生徒一同に点茶をさせる。  
鬮引にて客、亭主をきめ、手前を見る。余、午下一時より岩倉氏、小松宮、北白川宮様を  
訪て、日暮帰宅す。

十一月十日 丁酉 月曜 晴。

(コノ日、記事ナシ)

十一月十一日 戊戌 火曜 晴。

来客、渡辺玉子。午下二時より、余、桃子、観世氏えゆく。

払方摘要 観世え会費、一円三十銭。

十一月十二日 己亥 水曜 晴。毎夜の月、殊に清く、昼の如し。

書をよす、渡辺玉子。

受方摘要 酒井氏、千疋。

十一月十三日 庚子 木曜 晴。

寄書、三島大草茂岡。

十一月十四日 辛丑 金曜 晴。

(コノ日、記事ナシ)

十一月十五日 壬寅 土曜 晴。

(コノ日、記事ナシ)

十一月十六日 癸卯 日曜 晴。

午下早々宮城姉小路御局え参る。良子殿と閑話す。園典侍さまにも久々にて面談す。日暮  
去る。

十一月十七日 甲辰 月曜 晴。

(コノ日、記事ナシ)

十一月十八日 乙巳 火曜 晴、夜雨。

(コノ日、記事ナシ)

十一月十九日 丙午 水曜 晴。

朝雨さつと降て後晴たり。陛下、大演習より御還行。

\*御還行（御還幸）

十一月二十日 丁未 木曜 晴。

余、桃子と同しく、夕照の紅葉を姉邸に観る。此時、約して明日塾生の紅葉見を催す。

十一月二十一日 戊申 金曜 晴。

授業畢る。午下二時より塾生一同を拉して五軒町姉邸の紅葉を観る。奇麗なり。生徒一同大悦にて、三時三十分より帰校する。来客、長松菅子。

十一月二十二日 己酉 土曜 晴。

朝雨のち晴たり。午下早々より、余、栄子、鶴子、菊枝、田中静子、市島藤のと同しく、原胤昭氏慈善会ニ、大隈氏庭園に開かる、出席す。この建築と云ひ、庭園と云ひ、実に善美を尽したるも、先是に及ふものなきと云ふ。菊花ハもはや過たり、紅葉は染尽したり、先一順廻りて帰宅す。午下二時也。

十一月二十三日 庚戌 日曜 陰後雨、夜大雨。

新嘗祭。午下早々、余、正子と同しく、渋沢氏ニ而四恩瓜生会秋季大会ニ行。久々にてこの庭園を見る。庭一順廻りて、夫より滝の川ニ紅葉を觀。頗る見頃なり。帰宅す。時、三時也。雨に逢ず。

払方摘要 会費、及買物、茶代共、壹円廿錢。

十一月二十四日 辛亥 月曜 晴。

授業畢る。午下二時より神田女子美術学校ヨリ招待により桃子と同しく行。旧学校之狭き所に三層造りの教室にて、いかにも危険究りなし。

払方摘要 美術学校造花買物、一円。

\*危険究りなし（危険極りなし）

（十一月二十五日〜二十七日、記載ナシ）

十一月二十八日 乙卯 金曜 雨。

午下早々新宿ニ行て、四時頃帰。愛治郎、觀世ニ於て礎開きを行ふ、銀無地黒骨扇子、余雁二羽を揮ふ。是を人々え贈る。

\*礎（きぬた）

十一月二十九日 丙辰 土曜 晴。

午下四時、觀世に於て能樂会ニ会す。能、清之弱法師、觀世安達原。夜能済て八時歸。

十一月三十日 丁巳 日曜 朝雨、午下はれたり。  
来客、万里小路通房。

(十一月會計、記載ナシ)

(十二月)

十二月一日 戊午 月曜 晴。

来客、万里小路直房。

田村氏より白ふらねる一反。

受方摘要 博文館、三円。

\*白ふらねる(白フラネル)

十二月二日 己未 火曜 晴、夕かたより木からしの風ふく。

来客、江副熊子、静子、忠子。今日より勅題うた書はしめる。

十二月三日 庚申 水曜 陰 五十一度、はしめて寒さを覚ゆ。

来客、筆工宮内得応。

払方摘要 橋岡え三円。

十二月四日 辛酉 木曜 晴。

午下三時より一番町三井氏え素謡納会ニ行、九時歸。

十二月五日 壬戌 金曜 晴。

早起。散歩して歸。

受方摘要 容齋軸物、北村ヨリ三十五円、請取。

十二月六日 癸亥 土曜 陰、夕景より大雨覆盆。

夕景より、すま子来り、一泊す。

十二月七日 甲子 日曜 晴、夕景より雨降り出したり。

觀世会装束納能楽を見て歸。三井得右衛門の鉢の木、衣装の立派のなるを見て、

ひんぼうか三井の佐野の源左衛門

\*立派（の（ママ））なる

十二月八日 乙丑 月曜

朝、新聞紙を見而、西善寺養子幡雄、上野御院殿下ノ線路にて、昨夕五時半頃轢死をくわ  
たて、**重性**なりと云ふ。驚て裏松子え電話にて聞合せたるに、已に死去致されたりと云。  
実に可悲、可悔、惨然涙如雨。

\*重性（重傷）

（十二月九日、記載ナシ）

十二月十日 丁卯 水曜 晴。

早起。散歩して帰。午下早々佐野常民伯薨去ニ付、弔詞伸ル。御暇乞する。訃音、佐野常  
民伯七日午後五時三十分薨去、来ル十二日出棺、青山ニ神葬。同しく美術協会よりも訃音  
来る。上野美術協会にて橋本雅邦銀婚式祝ニ付、雅邦画展覧を觀而帰。

十二月十一日 戊辰 木曜 晴、夕景より雨降り出したり。

早起。散歩して帰。勅題懷紙及豎詠草書上ル。

十二月十二日 己巳 金曜 雨。

授業畢る。午下四時より觀世舞台にて夜能見物する。蟻通木下、角田川清之、熊坂觀世。八  
時畢而帰。来客、石山すま子、一宿。

命号。花帳、築井米子。花景、秦泉寺雪恵。花靄、吉田石子。花暈、賀田菊。花新、井上  
秋。花舜、植竹政。花秀、波多野すま。花瑩、森政。花嶺、武井作。花穂、掛江式。花国、  
檜垣照。花晃、山田梅。花綵、伊藤花。花郷、押上清。花英、吉田雪枝。花晷、三条末。  
花莖、横川実。

田村氏より紋御召一反。

十二月十三日 庚午 土曜 晴。

午下一時より浅草婦人法話会ニ行。御門主光瑩様講話及渥見氏、久々にて聴聞す。畢而御  
門主と閑話、已而帰。庭の梅花始而二りん開く。

十二月十四日 辛未 日曜 昨夜よりかけて終日雨降り通したり。

朝九時より生徒点茶会執行す。講堂楼上にて、台子点四人ツ、客三人宛にて、午後四時全  
畢。午下二時頃強震あり、時計止ル。

十二月十五日 壬申 月曜 晴 五十八度、暖か也。

絹本豎物、紙本横物揮毫。書至、九条恵子。来客、山崎兵四郎妻及初喜、良縁治定二付、御礼に来ル。

受方摘要 奥村鉄子潤筆、五円。山田梅子、五円。

十二月十六日 癸酉 火曜 晴。

山崎初喜、来ル十八日興入二付、白縮緬一反箱入を祝ふ。

受方摘要 秦泉寺雪恵初八人より四十円。

十二月十七日 甲戌 水曜 晴。

来客、岡崎忠子、一宿。

受方摘要 三条末子、五円。女官五人、十五円。

十二月十八日 乙亥 木曜 晴、月清し。

有約、午下五時より烏森扇芳亭に行。山崎はつ喜子、前川氏と結婚の祝宴ニ招かれる。浅野宗一郎氏を始として三十余名の来客、盛なり。十時過、めて度ひらきて帰。十一時。

受方摘要 森政子、五円。

十二月十九日 丙子 金曜 陰。

早起。散歩して帰。事務所なる星、心得違ひにて、この夜脱走したり。

十二月二十日 丁丑 土曜 晴、夜雨強し。

(コノ日、記事ナシ)

十二月二十一日 戊寅 日曜 晴。朝始て氷を結ぶ。初霜おきたり。夕景雨ふり出したり。

朝九時より、余、桃子と観世に能を観る。七時頃帰。

受方摘要 斎藤梅、十円。

十二月二十二日 己卯 月曜 雨、朝雨強し。午後より晴たり。

来客、安田暉子。生徒試筆の稽古にかゝる。

受方摘要 安田輝子、山田梅、園小菊、三円。

払方摘要 尾張屋銀行え預ケル、百円。

十二月二十三日 庚辰 火曜 晴。

課業例の如く済て、午下五時より第六教場裝飾して立食場とする。第四、余興種々趣工なる演芸アリ。紅灯百数をかゝける。其外ランプ等所々につる。当年ハ一層の興味アリ。唱歌、遊技、八時半全畢。

受方摘要 美術学校校長正木氏 五円、九条家、二円五十銭。  
\*趣工(趣向)

十二月二十四日 辛巳 水曜 晴。  
生徒一同試筆書上ル。午下二時全畢。午下三時より塾生帰省する。事務省多忙二付、関直威子を頼み、事務を手伝呉られ候。

受方摘要 上杉氏、一円。会計より十月、十一月、廿円。

払方摘要 十月、十一月雑費、三十六円也。

\*事務省(事務所)

十二月二十五日 壬午 木曜 晴。

朝より塾生続々帰省する。

戸田氏より一楽織一反。

受方摘要 閑院宮様、三十円。森政、律、五円。檜垣照、十円。戸田氏、五円。松平妙、五円。

十二月二十六日 癸未 金曜 晴。

朝より歳末贈り物拵テ方々え使出す。午下より方々え歳末に出る。夕景帰。

原氏より白紋羽二重一疋。

受方摘要 武井作、五円。三条家、十円。

払方摘要 鷺田仕立物、二円五十銭。橋岡え三円。尾張屋銀行え百円預ケル。

十二月二十七日 甲申 土曜 晴。

早起。大すゝ払する。

受方摘要 岩倉八千、二円五十銭。同、十五円。田中久子、五円。

十二月二十八日 乙酉 日曜 晴。

関直剛帰宅する。

受方摘要 今城友子、二円五十銭。

払方摘要 買物、十三円。

十二月二十九日 丙戌 月曜 晴。

来客、松永妻、山崎八重子母。

受方摘要 市川栄子、三円。

払方摘要 五軒町下婢下男え老円。

十二月三十日 丁亥 火曜 晴。  
新年状端書、三百枚書上ル。  
受方摘要 酒井藤子、一円廿五銭。三円。

十二月三十一日 戊子 水曜 陰、折々陰晴不定。午下二時頃地震、長く強し。  
朝、白山神社え参詣して帰。暮の掃除、何かとこしらへにいそかし。先々本年も無事、病人もなくめてたく年を送り、あなかしこ。  
閑院宮様より白紋羽二重一反。

弘方摘要 三井払、廿五円四十二(銭)。表具二幅、三円五十銭。端書代、一円。印紙、一円五十銭。

\*こしらへ(拵へ) \*いそかし(忙し) \*めてたく(目出たく)

(十二月会計、記載ナシ)

(挿入紙)

明治廿五年  
明治廿六年  
二月廿六日 押元鏡子死  
三月三十日 下婢中村いと死  
九月廿七日 辻重義妻宮原竹の

(明治三十五年会計)

一月 二日 海苔十帖入九十銭、四箇、三円廿銭  
十三日 車夫え祝義、金二円

\*祝義(祝儀)

十五日 愛国婦人会本年会費、金二円

十九日 黒木綿紋附一反、三井

三十日 赤綿ふらむねる一反、きぬや

\*ふらむねる(フランネル)

二月 七日 紋羽二重染もの一反、三井

木綿紋附染物

さゝ木祐寛え香料、金壹円

\*さゝ木祐寛(佐々木祐寛)

ちゝふ紺かすり一反、石山家、四円

\*ちゝふ(秩父)

白ちゝぶ一反、石山家、二円九十銭

紋羽二重裕ひふう仕立、わし田

廿二日

菓子一箱、九十五錢、紅や

\*ひふう(被風) \*わし田(鷺田)

三月 四日

大和田氏え表取替、金千疋

三十一日

橋岡氏、表取替、金三円

紋羽二重小袖仕立、金三円、わし田氏 \*わし田(鷺田)

四月より

竹田画賛陽月枯木斐翠、応挙槌、表取替、金八円 \*斐翠(翡翠)

五日

茶支那紋縮緬色上ケもの、三井

誕生日祝、三浦、佐伯え、金壹円

外次え、廿錢ツ、

誕生日祝二付、洋食十五皿、支那紋縮緬黒色上ケ、三井

五月より

九日

新めりんす一反、金壹円、米より \*新めりんす(新メリンス)

浅黄木綿一疋、金壹円四十六錢、絹や

六月より

七日

紹縮緬鼠色上ケ、津田や

夏のひざ掛、六円五十錢

奈良療治七回、貳円九十錢

ゆかた地一反、金壹円廿五錢、絹や

びすけ、一円、紅や \*びすけ(ビスケ)

橋岡、表取替、金三円、六月分

すきや、金六円五十錢位、絹や \*すきや(透綾)

生めりんす裾よけ七組、同 \*生めりんす(生メリンス)

生絹せる裾よけ一組、同

ひすけい二箱、三円、紅や \*ひすけい(ビスケイ)

干菓子三箱、貳円四十錢、松や

橋岡え表取替、金三円

紹の縞染、三井

本箱、見台、さし物や \*めりんす(メリンス)

めりんすしとね、絹や、橋岡え、三円

西洋菓子、二円

小袖一重仕立、わした \*わした(鷺田)

裕同、同

小紋縮緬染代、津たや

十二月より



- 二日
  - ＼木綿縞一反、絹や、金壹円六十五銭
  - 鉾三十箇、あはや
  - ひん付、同
  - ぬけ毛、同
  - \*ひん(鬢)
- 六日
  - ＼羽織紐、八十銭、松や
  - ＼吉野織袴羽織仕立、わした
  - \*わした(鷺田)
- 十五日
  - ＼木綿茶縞一反、壹円六十五銭、よね
  - ＼黒木綿一反染代地共、二円五十銭、三井
  - ＼めりんす友仙壹丈、金二円四十銭、絹や
  - \*めりんす(メリンス) \*友仙(友禪)
- 十三日
  - めりんす八掛、同
  - \*めりんす(メリンス)
- 同
  - 白キヤラロ、同
  - \*白キヤラロ(白キヤラロ)
- 十五日
  - 白唐木綿、同
  - \*白ふらんねる(フランネル)
- 十八日
  - 白ふらんねる一反
  - ＼伊勢崎紬一反、安田照子、三円五十銭